

得ヘシ而シテ政府ハ右ノ郵便物ヲ運送配達ノ爲メ至當ノ方法ヲ設クヘシ

第十二條 病院ニ入ル患者ハ治療及ヒ必需品ヲ受クルヲ得ヘシ  
病院又ハ停泊ノ船内ニ在ル患者ヲ尋訪セント欲スル人ハ地方檢疫局ニ於テ定メタル方法ニ從フヘシ

避病院ニ關係ナキモ醫業ニ達シタル醫士ハ患者又ハ其代理人ノ請ニ由テ診察協議スルヲ得ヘシ

第十三條 船中ニ於テ眞症虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スルヲナキトハ停留セラレタル人ヲ船中ニ停メ置クヲ得ヘシ又ハ地方檢疫局

ニ於テ衛生上ノ見込ニ從ヒ特ニ陸地ニ設ケアル避病ノ場所ニ移サルヲ得ヘシ

第十四條 (明治十二年七月三十一日第三十號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

檢疫停船規則施行ノ港ニ來着スル船舶ニ於テ檢疫官吏之ヲ虎列刺

病ノ源因ナラント思考スル疑似ノ病徴ヲ發スル者アルトハ其患者ハ病院ノ別室ニ移シ船ハ醫士ニ於テ其病症ヲ診斷スルニ充分ノ時間ヲ終ル迄停留セシムヘシ但其時間ハ四十八時ニ過クヘカラス而シテ地方檢疫局ハ醫士ノ報告ニ依リテ該規則ノ内其場合ニ適スル條款ヲ實施スヘシ

第十五條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヲ發シ船用品或ハ荷物積込ノ爲メニ途中檢疫所ノ設ケアル無病ノ一港ニ立寄タル船舶ハ豫メ檢疫官吏ハ検査ヲ經且ツ必要ト認メタル消毒法ヲ行ヒ船用品或ハ貨物ヲ積入ル、毎ニ地方檢疫局ヨリ指示スル方法ニ從フ可シ

又該船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發シタルトハ該船又ハ其乗込人及ヒ物品ヲ處置スルハ第八條第九條ニ準スヘシ但シ該船内ヨリ上陸スル者アルトハ他船ニテ到着シタル人ニ行フヘキ同一ノ處置ヲ爲スヘシ

第十六條 船舶ノ検査ハ其來着後成ルヘク速カニ施行スヘシ若シ來着後十二時間ヲ過キテ検査ヲ爲サルトハ入港スルヲ得ヘシ但シ

其遲延天氣惡キカ爲メカ又ハ避ケ難キ事情アルカ爲メカ又ハ船長若クハ該船ニ關係アル人ノ所行或ハ詐僞ニ出ツルカノ限ハ此限ニ在ラス其場合ニ於テハ其遲延シタルノ事故終リタルキ検査ヲ爲スヘシ

第十七條 地方檢疫局ヨリ指圖シタル消毒法ハ檢疫官吏之ヲ施行シ其船ノ士官及ヒ船員之ヲ補助スヘシ但消毒法ハ之ヲ命シタル時ヨリ成ルヘク二十四時ニ完了シ而シテ其入費ハ船主又ハ其實アル者ヨリ辨償スヘシ

第十八條 檢疫停船規則ヲ施行スル港内ニ碇泊中船内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發シタル船舶ハ直ニ第八條第九條ノ規則ニ從フヘシ

(明治十二年七月卅一日第三十號布告ヲ以テ第二項左ノ通改正ス)  
然リト雖モ若シ其船既ニ本港ニ於テ停留ヲ經タルキハ檢疫官ハ地方檢疫局ニテ必要ト考斷スル丈ケノミノ消毒及ヒ検査ノ方法ヲ反復施行スヘシ

第十九條 (明治十二年七月卅一日第卅號布告ヲ以テ左ノ如ク改正ス)

虎列刺病既ニ流行スル港内ニ來着スル船舶検査消毒法患者及ヒ死者ノ處置ヲ爲スハ前記ノ規則ニ從ハシムヘシ右ヲ施行スル爲メノ豫備ハ政府ニ於テ爲スヘシト雖モ船及人員停留ノ規則ハ休止スヘシ

第二十條 第六條第八條及ヒ第九條ニ記スル船舶ノ景狀地方檢疫局ニ於テ特ニ公衆ノ健康ニ危險ナリト思慮シ非常ノ處置ヲ必要トスルキハ此規則外ニ豫防ノ嚴制ヲ施スヲ得ヘシ其場合ニ當リテ地方檢疫局ハ直ニ中央衛生會ニ臨時ノ報告書ヲ差出スヘシ而シテ右報告書ノ寫ハ請求ニ依リテ地方檢疫局ヨリ之ヲ該船ノ船長船主又ハ其用途ニ付與スヘシ

第二十一條 検査中又ハ停留中ノ船舶又ハ停留人ノ寓所ニハ凡ソ何人ヲ問ハス地方檢疫局ノ許可ナクシテ往クヲ許サス

第二十二條 前條ノ規則ヲ施行スルニ就テ其人ニ係ル所ノ食料醫藥其他欠クヘカラサル費用ハ其本人又ハ代理人ヨリ辨償スヘシ

第二十三條 此規則ニ背キ或ハ從フコヲ拒ム者ハ犯ス毎ニ貳百圓以  
 内ノ罰金ヲ科スヘシ若シ其船長船主若クハ其船ノ用達又ハ其各人  
 若クハ一人ノ命令又ハ利益ノ爲メ此規則ニ背キ或ハ從フコヲ拒ム  
 者ハ每犯罰金五百圓ニ至ルマテ増加スルコトアルヘシ  
 此規則ニ就テ拂フヘキ費用ヲ辨償セサルモノアルキハ民事ノ訴訟  
 ヲ以テ之ヲ要求スヘシ  
 但シ罰金ハ科セサルヘシ  
 此規則ヲ犯シ停留場ヲ脱去スル者ハ(船又ハ人)罰金ヲ科シ且即時  
 停留場ニ返ラシムヘシ

第三節 牛痘苗

○八年十月内務省乙第二百二十八號達  
 牛痘ノ儀ハ傳種久シキヲ經ルニ從ヒ自然豫防ノ効力ヲ減スルノ虞モ  
 有之ニ付新鮮ノ牛痘苗毎年郵便ヲ以テ分與可致候條管下ヘ普及候様  
 取計可申此旨相達候事  
 但臨時痘苗變性或ハ缺乏スルコトアラハ其時々當省ヘ可申出事

第三節ノ二 種痘施術心得

○十八年三月内務省中第九號達  
 明治十三年<sup>九</sup>當省乙第三十六號達傳染病豫防心得書附錄トシテ種痘  
 施術心得書左ノ通追加候條此旨相達候事  
 種痘術ヲ施ス者ハ種痘ノ適否接種ノ方法痘苗採收及時蓄ノ法善感不  
 善感ノ鑑別種痘ノ注意等ヲ詳知セサル可カラス其要左ノ如シ

第一 種痘ノ適否

- 第一條 種痘ハ左ニ掲クル者ニハ施サ、ルヲ可トス
  - 一 生後七十日ヲ經サル者
  - 二 種痘ノ爲ニ一時増進スヘキ病患アル者
  - 三 丹毒流行ノ土地ニ居住スル者
  - 四 蔓延性ノ皮膚病アル者
  - 五 熱性病ニ罹リ居ル者
- 第二條 種痘ニ適スル時期ハ春(三月四月五月)秋(九月十月十一月)  
 二季ヲ以テ最良トス然レモ四季共ニ之ヲ施シテ妨ナシ

第二 接種ノ方法

第三條 種痘ヲ施スハ上膊<sup>三稜筋</sup>ニ於テ各々三針乃至五針<sup>受痘者ニ隨フ</sup>トシ各針ノ距離曲尺五分以上ニシテ痘疱ノ暈輪互ニ密接セサル様注意スヘシ

第四條 施術ニ先キ針尖ヲ拭淨シ一時ニ數人ニ接種スルキハ一人毎ニ之ヲ拭淨スヘシ

第五條 良性ナル痘漿ヲ採リテ移種スルヲ確實ノ良法トスレバ此法ヲ行フコト能ハサルキハ貯蓄ノ痘苗ニシテ成ルヘク新鮮ナル者ヲ撰ヒ用フヘシ但痂皮ハ用ヒサルヲ可トス

第三 痘苗採收及貯蓄ノ法

第六條 痘苗ハ左ニ掲クル者ヨリ採收スヘカラス

- 一 痘疱ノ成形過度及過大ノ者 發暈非常ニ大ナル者 泡縁又ハ暈部ニ水泡ヲ生スル者 痘疱非常ニ隆起シテ澄明ノ漿液ヲ漏出スル者 一種ノ疑フヘキ色例ヘハ紅藍色ヲ呈セルカ如キ者
- 但此等ノ異常痘疱ノ近傍ニ在ル正泡モ亦同シ

二 痘漿ノ血液ヲ混セル者 泡ノ中央ニ在ル痘漿ノ腐敗ニ向ントスル者 痘疱ノ已ニ化膿ニ傾キシ者 爬搔又ハ摩擦ノ爲ニ痘疱破潰セシ者

三 梅毒腺病及ヒ皮膚病ニ罹リ居ル者 營養不良ノ者

四 丹毒ヲ併發セル者 經過不整ニシテ不善感ノ疑アル者<sup>第十四條參觀</sup>

五 天然痘ヲ經タル者 再三種ノ者

第七條 痘漿ヲ採ルハ通常接種後第八日<sup>二十四時間ヲ以テ一日ト算ス下皆同シ</sup>ヲ以テ

佳トスト雖時候ノ寒暖及各人ノ性質ニ隨ヒ第七日又ハ第九日ヲ以テ適度トスルコトアリ痘疱ハ善感良性ノ者ニシテ其含包セル所ノ漿液ハ渾濁セス粘稠露滴ノ如クナルヘシ

第八條 痘漿ヲ採ルニハ痘疱ノ中心ヲ避テ泡面ヨリ斜ニ淺ク刺シ深ク刺シテ出血セシムヘカラス

第九條 發痘一顆ナル者ノ痘疱ハ其漿液ヲ採ルヘカラス又數顆アルモ其一顆ハ傷クヘカラス

第十條 痘苗ヲ貯蓄シテ接種ノ用ニ供セントスルニハ硝子板間ニ貯

ヘテ密封シ又ハ硝子製毛細管ニ吸入セシメテ其兩端ヲ固封シ日光及寒熱ノ劇度ヲ避ケ貯フヘシ（痘苗ノ貯蓄法甚宜キヲ得ルキハ五箇月間充分ノ効力アリ）

第四 善感不善感ノ鑑別

第十一條 種痘ノ善感不善感ヲ鑑別スルニハ左ノ各項ヲ以テ要點ト爲ス

- 一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メシヤ否
  - 二 痘疱常形ニシテ其大サ及硬サハ皮下皮上共ニ同一ナルヤ否
  - 三 紅暈ハ常形ナルヤ否
  - 四 經過整然トシテ其時期ヲ誤ラサルヤ否
  - 五 第八日ニ至リテ微熱ヲ發スルヤ或ハ然ラサルモ其他ノ微候ヲ呈スルヤ否
  - 六 痂皮ハ黯褐色又ハ黒色ニシテ其厚サ及硬サハ常度ナルヤ否
- 第十二條 種痘ニ感ノ微候ハ左ノ經過ニ就キテ知ルヘシ  
接種後第一日第二日ノ間ハ他ノ刺傷ニ異ナルヲ無シ施術後針痕ノ

周圍ニ淡紅色ノ小暈ヲ發スレドモ暫時ニメ消失ス（或ハ此暈ヲ見サルコトアリ）

第三日ニハ針痕ノ部ニ小ナル紅點ヲ生シ試ニ指頭ヲ以テ之ニ觸ルレハ稍々隆起セルヲ覺ユ（經過緩慢ナル者ハ第四日第五日ニ至リ始テ此紅點ヲ生スルコト有リ）

第四日ニハ紅色ニシテ硬ク且ツ隆起セル圓形若クハ橢圓形ノ小結節ヲ生ス

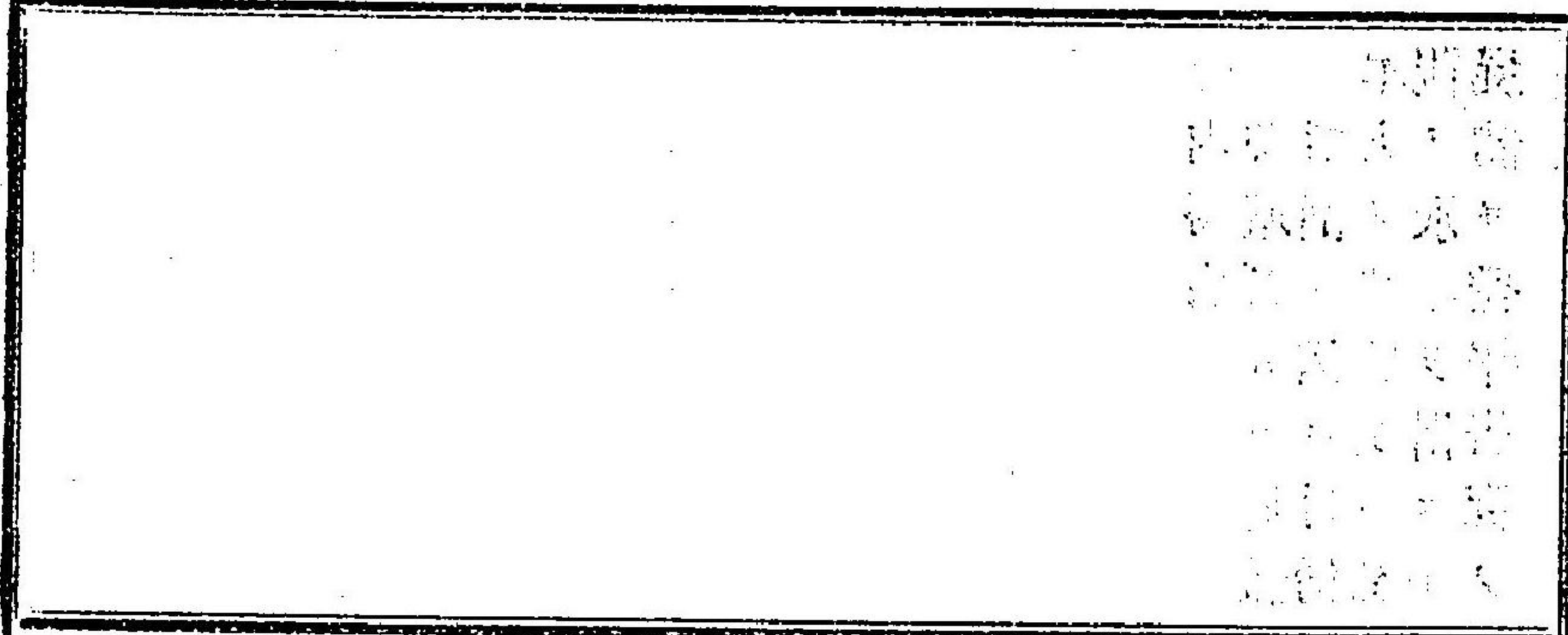
第五日ニハ結節細小ノ水泡ト爲リ其周圍ニ狭キ紅暈ヲ見ル

第六日ニハ水泡稍々増大シ其邊緣隆起シテ泡ノ中央ニハ陷凹ヲ呈シ泡中ニハ稀薄透明ニシテ稍々帶藍色ナル液ヲ充實シ周圍ノ紅暈稍々増大ス

第七日ニハ諸症益々増進ス

第八日ニハ痘疱全ク成形ス其大サハ豆大ニシテ周圍ハ痲腫シ微シク疼痛アリ泡中ノ液ハ倍々充實シ紅暈亦著シク増大ス此期ニ當リ（或ハ此期以前）微熱ヲ發シ或ハ全ク熱候ナク顔面ハ蒼白色ヲ呈ス

ルコアリ又腋下ニ疼痛ヲ覺エ水脈腺腫起スルコ有リ  
 第九日ニハ紅暈更ニ増大シ其色澤モ亦加ル  
 第十日ニハ疱液化膿シテ白濁或ハ黃色ノ濃稠液ト爲リ疱ノ中央稍々凸隆ス然レモ其形必太扁圓ナリ  
 第十二日ニ至ルマテハ痘疱其形狀ヲ變スルコ無ク此日ヨリ收斂ヲ始メ疱ノ中央ヨリ邊緣ニ向ヒテ次第ニ乾固シ漸ク褐色ニ變シ周圍ノ紅暈モ亦漸ク消退ス  
 爾後黯褐色又ハ黑色ニ堅實ナル厚痂ヲ結ヒ初ハ皮膚ニ緊著シテ容易ニ剝離セズ結痂後八日乃至十日ニ至リ始テ剝脫ス其剝脫ノ後ニ遺セル癍痕ハ圓形又ハ橢圓形ニ淺キ凹窩ヲ爲シ其窩内ニハ更ニ數多ノ小凹點ヲ呈ス  
 但一回種痘セシ者ニ再三種シテ感染スルコアルモ其痘顆小ニシテ七八日間ニ全ク經過スルヲ常トス  
 第十三條 種痘不善感ノ諸徴ハ左ノ如シ  
 一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メ常形ニ達セズノ直ニ廣ク蔓延



セル炎症ヲ發シ皮下發ニ硬キヲ覺ヘズノ紅暈ハ不整形ナリ痘疱ハ速ニ化膿シ其隆起ノ狀或ハ半球形或ハ圓錐形ト爲リ乾固スレハ黃色ニノ鬆疎ナル痂皮ヲ結フ(時トシテ第二日後ニ成形ヲ始ムル者アレモ其經過總テ不整ナルヲ以テ自ラ善感ノ者ト區別スルヲ得ヘシ又不善感ノ者ト雖モ腋下ニ疼痛ヲ覺エ微熱ヲ發スルコ無キニ非ズ)  
 二 接種後第一日ニ大ナル赤色ノ疱ヲ生シ速ニ漿液ヲ充實シ上皮破レテ膿面ヲ呈シ或ハ濕潤セル淡色ノ痂皮ト爲ルヲ見ル  
 三 紅暈速ニ増大シテ腫起シ或ハ遂ニ潰瘍ニ陥ル  
 四 第八日ニ至リ數疱相合シテ一大潰瘍ト爲リ或ハ一面ノ痂皮ヲ結ヒ其潰瘍又ハ痂皮ノ周圍ニハ廣ク赤色ヲ呈ス  
 五 痂皮剝脫ノ後ニ遺セル癍痕ハ深ク不整形ヲ呈シ其底面平滑ナリ  
 第五 種痘ノ注意  
 第十四條 初種ノ不善感ハ痘苗ノ不良ナルカ或ハ其人一時ノ不感性

○内務省  
 茨城縣ヨリ屍體  
 本解剖ノ儀又ハ屍  
 親ノ遺言ヲ得タル  
 屍體ヲ承諾ヲ得タル  
 醫學研究ノ至

チ有セルニ因ル者ナルカ故更ニ三四週ノ後善長ナル痘苗ヲ撰ヒテ  
 再ヒ接種スヘシ

第十五條 種痘ヲ施スニ當リテハ併發症ヲ防キ殊ニ天然痘流行ノ際  
 ニハ接種後第八日ニ至ルマテハ嚴ニ其感染ヲ防禦スヘシ然レモ受  
 痘者已ニ暗ニ天然痘ニ感染シ其潜伏期ニ於テ接種スルコト間々之ア  
 リ

第十六條 天然痘流行シ種痘ヲ猶豫ス可カラサル際ニハ第一條各項  
 ニ掲クル者ト雖熱性病ヲ除クノ外ハ總テ接種スヘシ

第十七條 種痘中ハ寒冷ヲ避ケシメ成ルヘク清潔ノ空氣中ニ居ラシ  
 △ヘシ平常慣習セル食物等ハ總テ禁忌スルニ及ハス又別ニ醫藥ヲ  
 要セス

○第二章 醫術

○第一款 醫術

第一節 醫師免許規則

○十六年十月第三十五號布告

爲メ所患局ノ部ハ其醫  
 剖ヲ行フハ其醫  
 員並死ノ親戚等  
 連署爲候ノ親戚等  
 テ可然哉候ノ親戚等  
 指合 願出候儀ト可  
 心爲願出候儀ト可  
 一明得事出候儀ト可  
 〇内務省ヨリ醫師  
 三開業規則ノ儀ニ  
 第三付則第五號布告醫  
 師規第十五條但書醫  
 業ノ則第一條ハ縣限  
 此内ニ合蓄スル儀カ  
 月廿九日  
 明治十六年十月  
 指令 明治十六年十月

第一條 醫師ハ醫術開業試験ヲ受ケ内務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者  
 トス  
 但此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ證ハ仍ホ其効アリ  
 トス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經  
 由シテ内務省ニ願出ツヘシ

第三條 官立及府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開  
 業免狀ヲ得シコト願出ツルルハ内務卿ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ  
 授與スルコトアルヘシ(明治十六年十一月内務省乙第四十六號達ヲ  
 參看ス可シ本節末尾ニ在リ)

第四條 外國ノ大學醫學部若シハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外  
 國ニ於テ醫術開業免許ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ  
 開業免狀ヲ得シコト願出ツルルハ内務卿ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ  
 要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條 醫師ニ乏キ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ内務卿ハ醫

○一月二日

内務省ヨリ醫師  
長崎縣ヨリ醫師  
免許期則ノ儀ニ  
付同今般第三  
第一條則第三條  
第十條則第三條  
免許規則第三條  
第四條則第三條  
出願ニハ別途  
修學履歴ニハ  
モサル儀ニ可  
之哉同第五  
第二條ヨリ假開業  
免狀ヲ得タル者  
他縣或ハ管内ト  
難モ他郡區ハ轉  
籍留候場合ハ  
免狀返納セシム  
ヘキ儀ニ有之哉  
但當縣管內ニ  
シテ醫師住ノ場  
キ所ニ乏シハ

術開業試験ヲ經サル者ト雖モ其履歴ニヨリ假開業免狀ヲ授與スル  
コアル可シ

第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登録シ時  
々之ヲ公告スベシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書  
換ヲ厭フ者ハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出シ

第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納  
ムベシ

第十條 醫師廢業又ハ死亡シタルハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀  
ヲ内務省ニ返納スベシ

第十一條 醫師其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルハ中央衛生  
會ノ審議ヲ經内務卿ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコアルベシ  
但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本條ニ準シ處分スルコ  
アルベシ

第十二條 前條ニ據リ醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルハ地方廳  
ニ於テ直ニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ内務省ニ返納ス可シ其停止ノ  
處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳  
印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スベシ

第十三條 内務卿ハ醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖モ本人ノ行狀  
ヲ調査シ中央衛生會ノ審議ヲ經特ニ其禁止ヲ解クコアル可シ  
參 着

○十六年十一月内務省乙第四十六號達

本年第三十五號布告醫師免許規則第三條ニ據リ試験ヲ要セス免狀ヲ  
授與スベキ者ハ東京大學及ヒ左ノ條件ヲ具ヘ當省ノ特許ヲ得タル醫  
學校ノ卒業證書ヲ有スル者ニ限リ候條右ニ適應スル醫學校有之候向  
ハ其校則教則及ヒ教員履歴書生徒員數其他學校ニ關スル一切ノ書類  
取纏メ豫メ當省ヘ稟議スヘシ此旨相達候事

但明治十五年太政官第四號ノ布達ニ依リ既ニ特許ヲ得タル向ハ此  
際更ニ稟議ニ及ハズ

第三條 假開業免  
狀ノ第六條  
及第九條  
料上ノ不  
儀候則及  
第四條  
ルニ該ル  
ルハ客年  
九號  
御示然通  
相  
右明也哉  
一治也  
令一月十  
指二條之  
第  
外ハ二條  
ノ但書儀  
申スヘキ



第三條 納シ手數料上  
 明治十六年十月三日  
 內務省  
 鳴根縣  
 免儀規則中疑義  
 第一府縣立官立及  
 四號客年文部省第  
 知甲乙兩種ノ校通  
 儀學ヲ指稱スル  
 一明治十六年十月  
 指令第一項前  
 內務省  
 規則  
 ○十六年十月第三十四號布達

一三名以上ノ醫學士(歐米ノ大學校ニ於テ卒業シタルモノ等其履歷ニヨリ本條ニ準スルヲアルヘシ)ヲ以テ教諭ニ充ツルモノ  
 一生徒ノ員數ニ相當セル助教ヲ置クモノ  
 一四年以上ノ學期ヲ定メ教則並ニ試驗法ノ完備スルモノ  
 一生徒ノ實地演習ヲ爲スヘキ病院アルモノ  
 一器械標本ノ具備スルモノ

第二節 醫術開業試驗規則

第一條 醫術ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試驗ヲ受クヘシ  
 第二條 內務卿ハ毎年二回醫術開業試驗ヲ舉行スヘシ但試驗ヲ舉行スヘキ地方及ヒ試驗期日ハ六ヶ月前之ヲ內務卿ヨリ告示ス可シ  
 第三條 內務卿ハ醫術開業試驗ヲ舉行スル毎ニ官立及ヒ府縣立醫學校病院ニ從事スル者又ハ地方ニ於テ學術名望アル醫師理化學者等ヲ撰ヒ試驗委員ヲ命ス可シ  
 但齒科醫術開業試驗ニ於テハ齒科醫一名ヲ試驗委員ニ加フルコ

第三條 免許規則中疑義  
 第一條 醫術開業試驗ハ之ヲ二期ニ分チ前期試驗後期試驗トス前後二期ノ試驗ヲ同時ニ受クルコトヲ得ス  
 但齒科醫術開業試驗ハ全科一時ニ受クルモノトス  
 第六條 試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ  
 前期試驗科目  
 第一 物理學  
 第二 化學  
 第三 解剖學  
 第四 生理學  
 後期試驗科目  
 第一 外科學  
 第二 內科學  
 第三 藥物學  
 第四 眼科學  
 第五 產科學  
 第六 臨床實驗  
 第七條 齒科試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ  
 第一 齒科解剖及生理  
 第二 齒科病理及治療

第一編行政 第十八類衛生 醫術開業試驗規則

第二條 齒科用藥品  
 第五 實地試驗  
 第四 齒科用器械

第八條 前期試驗ハ一ケ年半以上後期試験ハ更ニ一ケ年半以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコト得ス  
 (明治十七年一月三十一日太政官第二號布達ヲ以テ左ノ通り但書ヲ追加ス)  
 但齒科醫術開業試験ハ二ケ年以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコト得ス

第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷及前期試験及第ノ證書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス  
 但履歷書ニハ其師若ハ他ノ開業醫師二名以上ノ保證アルヲ要ス

第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行為アリト認ムル者アルハ之ヲ内務省ヘ具狀スヘシ内務省ニ於テ

第三條 齒科用藥品  
 第五 實地試驗  
 第四 齒科用器械

第八條 前期試験ハ一ケ年半以上後期試験ハ更ニ一ケ年半以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコト得ス  
 (明治十七年一月三十一日太政官第二號布達ヲ以テ左ノ通り但書ヲ追加ス)  
 但齒科醫術開業試験ハ二ケ年以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコト得ス

第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷及前期試験及第ノ證書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス  
 但履歷書ニハ其師若ハ他ノ開業醫師二名以上ノ保證アルヲ要ス

第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行為アリト認ムル者アルハ之ヲ内務省ヘ具狀スヘシ内務省ニ於テ

第三條 齒科用藥品  
 第五 實地試驗  
 第四 齒科用器械

第八條 前期試験ハ一ケ年半以上後期試験ハ更ニ一ケ年半以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコト得ス  
 (明治十七年一月三十一日太政官第二號布達ヲ以テ左ノ通り但書ヲ追加ス)  
 但齒科醫術開業試験ハ二ケ年以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコト得ス

第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷及前期試験及第ノ證書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス  
 但履歷書ニハ其師若ハ他ノ開業醫師二名以上ノ保證アルヲ要ス

第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行為アリト認ムル者アルハ之ヲ内務省ヘ具狀スヘシ内務省ニ於テ

第三條 齒科用藥品  
 第五 實地試驗  
 第四 齒科用器械

第八條 前期試験ハ一ケ年半以上後期試験ハ更ニ一ケ年半以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコト得ス  
 (明治十七年一月三十一日太政官第二號布達ヲ以テ左ノ通り但書ヲ追加ス)  
 但齒科醫術開業試験ハ二ケ年以上修學セシ者ニ非レハ之ヲ受クルコト得ス

第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷及前期試験及第ノ證書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務省ニ進達スルモノトス  
 但履歷書ニハ其師若ハ他ノ開業醫師二名以上ノ保證アルヲ要ス

第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行為アリト認ムル者アルハ之ヲ内務省ヘ具狀スヘシ内務省ニ於テ

ハ中央衛生會ノ審議ヲ經其情狀ニ因リ期限ヲ定メ試験ヲ許サ、ルコトアルヘシ

第十一條 試験問題ハ試験主事者試験委員協議ノ上之ヲ撰定シ試験場ニ臨ミ受験人ヲシテ筆答セシムヘシ  
 但時宜ニヨリ口答セシムルコトアルヘシ

第十二條 試験主事者ハ試験終ルノ後試験委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタル者ニハ直ニ及第證書ヲ與フヘシ  
 但及第證書ニハ試験主事者試験委員連署スヘシ

第十三條 試験ニ落第シタル者ハ半年ヲ終ルニ非レハ再試験ヲ請フコト得ス

第十四條 醫術開業試験ヲ受クル者ハ試験開場ノ前日迄ニ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

前期試験手数料 金三圓  
 後期試験手数料 金五圓  
 齒科試験手数料 金五圓

ノ如キモ縣令ノ命  
 スル處ニシテ地方  
 稅賦金等ヨリ俸給  
 給與致置儀ニモ  
 有之且地方衛生會  
 員中醫學ヲ以テ撰  
 拔セラレタルモノ  
 ハ雖シテ同縣令ヨ  
 リ命シ置キ候儀ニ  
 テハ命シ置キ候儀  
 比準スル可然候儀  
 ト相心得ルヲ得候  
 指 令 二 明治十六年十月  
 狀 授 醫 術 開 業 免  
 二 掲 載 ス ル 種 類  
 可 限 リ ハ 總 テ ア  
 ○ 愛 知 縣 醫 術 開 業 免 許 書 式

第十五條 受験中疾病及其他ノ事故アリテ試験ヲ中止シ又ハ落第シタル者ト雖モ前條ノ手数料ヲ返付セス

第二節ノ二 受験人心得

○十六年十二月内務省甲第二十六號告示

今般太政官第三十四號ヲ以テ醫術開業試験規則布達相成候ニ付右受験人心得左ノ通相定候條此旨告示候事

第一條 醫術開業試験ハ當省ヨリ告示シタル試験舉行地ノ中各自便宜ノ地ニ於テ之ヲ受ケルコト得ヘシ

第二條 醫術開業試験ヲ受ケント欲スル者ハ本年第三十四號布達醫術開業試験規則第九條ニ準據シ其願書ヲ住居ノ地方廳ヘ差シ出スヘシ

第三條 前條許可ノ指令ヲ受ケタル者ハ當省ヨリ告示シタル期限迄ニ試験舉行ノ地ニ着シ宿所氏名ヲ其地方廳ヘ届出スヘシ

第四條 試験手数料ハ試験舉行ノ前日迄ニ醫術開業試験場ヘ相納ムヘシ

本 年 付 試 験 規 則 ノ 儀 ニ  
 四 年 試 験 規 則 依 三 十  
 術 年 試 験 規 則 依 三 十  
 ノ 候 哉 一 月 治 十 六 年 十  
 之 候 哉 一 月 治 十 六 年 十  
 指 令 一 月 治 十 六 年 十  
 願 出 限 ナ シ 年 齡  
 ○ 一 月 治 十 六 年 十  
 内 務 省 規 則 儀  
 東 京 府 規 則 儀  
 試 験 規 則 儀  
 本 年 付 試 験 規 則 儀  
 四 年 試 験 規 則 儀  
 試 験 規 則 儀  
 據 規 則 儀  
 受 験 規 則 儀  
 其 願 書 及 履 歷 書 及  
 前 期 試 験 及 第 一 書 證

第五條 試験場ノ取締上不都合ト認ムヘキ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場セシムルコトアルヘシ

第六條 前期試験ニ於テ二日後期試験及齒科試験ニ於テ三日以上闕席スル者ハ其期ヲ試験ヲ終フルコト得ス

願書式

醫術開業試験願

住所(寄留ナレハ本籍ヲ併記スヘシ)

族籍

氏 名

年 月 生

私儀何年何月何地ニ於テ醫術開業前期(後期)齒科ナレハ醫術ノ上齒科(二字ヲ加ヘ前期後期ノ四字ヲ除ク)試験相受ケ度別紙書類相添此段奉願候也

年 月 日

右 氏 名 印  
 戶 長 氏 名 印  
 衛生委員 氏 名 印

內務卿宛

第三節

陸軍々醫部講習生假規則

○明治十八年八月陸軍省甲第三十四號達

陸軍軍醫部講習生假規則左ノ通相定候條此旨相達候事

但明治十六年達甲第二十五號達陸軍軍醫講習生假規則ハ廢止ス

陸軍軍醫部講習生假規則

第一條 軍醫部講習生ハ陸軍軍醫官ニ出身志願ノ者ヲ撰拔シ軍醫本

部ニ於テ之ニ要用ナル學術ヲ教授シ卒業ノ上ハ三等軍醫ニ等藥劑

官ニ任シ若クハ軍醫試補藥劑官試補トナシ其職務ヲ奉セシムルモ

ノナリ

第二條 講習生ヲ軍醫生藥學生ノ二トシ陸軍部内若クハ華士族平民

中軍醫生ハ醫術開業免狀藥學生ハ藥舖開業免狀ヲ所持スル者ニシ

テ檢査定格ニ合スル者ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 檢査合格ツ上採用スルキハ直チニ本人ニ達シテ入學セシム

而シテ陸軍部内ノ者ハ其旨趣ヲ軍醫本部ヨリ各所管ニ通報スヘシ

書ヲ副へ云々ト有  
之候改正前ノ科  
驗規則ニ據リ各  
外科門科及第シ  
既ニ右ノ試験及  
所シテ後期試験  
願者ハ再ヒ前志  
試験要セス直チ  
相成候事此段相  
得共念此段相候  
候也

指令  
明治十六年十月  
明治十七年十月  
明治十八年十月

但下士ヨリ入學ノ者ハ軍醫本部ニ於テ其本官ヲ免シタル後入學セ  
シムルモノトス

第四條 講習生ハ入學ノ日ヨリ陸軍一定ノ規則ヲ遵奉セシム故ニ入

學後ハ決シテ他志ヲ陸軍ニ從事スルノ誓約ヲナサシム

第五條 講習生修學ノ期限ハ五ヶ月トス然レモ疾病又ハ止ムヲ得サ

ル事故ニ由リ豫定ノ學術ヲ修得シ能ハサル者ハ尙ホ若干月ヲ延期

スルコアルベシ

第六條 講習生修學中ハ情願ヲ以テ歸省又ハ退學スルコトヲ許サズ然

レモ病氣若クハ行狀不正又ハ法則ヲ犯シ或ハ怠惰ニシテ卒業ノ目

途ナキモノハ退學セシムヘシ但下士卒ヨリ入學ノ者ハ更ニ下士若

クハ卒トナシ舊所管ニ復シ定期ノ年限中前日及ヒ生徒修學ヲ服役セ

シメ又華士族平民ヨリ入學ノ者ニシテ行狀不正或ハ怠惰等ニ依リ

退學セシムル者ハ入學中費ヲ直チニ上納セシムルモノトス

第七條 講習生ハ官費生ト自費生トノ二種トス其官費生ハ修學ノ費

用及ヒ居宅衣食ノ料トシテ若干ノ手當金ヲ給シ其自費生ハ一切ノ

費用總テ自辨タルヘシ但修學上ノ器械物品ハ官給トス

第八條 講習生ハ私宿ニ在テ日々軍醫本部ニ通學シ軍醫或ハ藥劑官ノ學術其他ノ事ヲ研究セシム但時宜ニ因リ醫官若クハ藥劑官ノ助手ヲラシムルコアルヘシ

第九條 講習生ハ學期ノ終リニ於テ試験ヲ行ヒ及第スル者ハ之ヲ優等及ヒ通常ノ二種ニ區別シ各卒業證ヲ授與ス

第十條 講習生ハ試験ヲ受ルノ後優等卒業證ヲ得タル者ハ三等軍醫若クハ三等藥劑官ニ任シ通常卒業證ヲ得タル者ハ軍醫試補若クハ藥劑官試補トナスヲ例トス但優等卒業證ヲ得ル者ト雖モ修學中懲罰ノ所斷ヲ受ケシ者等ハ軍醫試補藥劑官試補トナスコアルヘシ

第十一條 講習生召募ハ陸軍卿之ヲ陸軍部内及ヒ府縣ニ達シ其檢査格例ニ準據シ軍醫本部ニ於テ之ヲ爲スヲ例トス故ニ軍醫本部長ハ所要ノ人員並ニ召募ノ時期等ヲ豫メ陸軍卿ニ上申スヘシ但時宜ニ依リ在東京ノ者ノミチ召募セシムルコアルヘシ

第十二條 講習生召募ノ達アレハ陸軍部内ニ在テハ近衛鎮臺又ハ各

官廨ニ於テ其志願者ヲ取調ヘ左式ノ書面ニ本人ノ名簿寫並ニ醫術開業免狀或ハ藥舖開業免狀寫ヲ添ヘ軍醫本部ニ送附シ各府縣ニ在テハ之ヲ管下ニ達シ志願者ヲシテ第十三條ノ手續ヲ爲サレムヘシ

軍醫部講習生入學志願人名

隊號(所管)

官 姓 名

年號月日生

全

何兵卒 姓 名

全全

右軍醫部講習生入學志願ニ付名簿寫並ニ醫術開業免狀(藥舖開業免狀)寫相添差出候間御檢査ノ上入學御差許有之度候也

(所管長官)

職官姓 名印

(軍醫本部長)

職官姓名殿

年號月日

第一編行政 第十八類補生 陸軍々醫部講習生假規則

第十三條 華士族平民ヨリ軍醫講習生志願ノ者ハ左式ノ願書ニ履歷書及ヒ醫術開業免狀(藥舖開業免狀)寫ヲ添ヘ本籍若クハ寄留地府縣ノ與書證印ヲ受ケ直チニ軍醫本部ニ差出スヘシ  
願書式用氏美濃白紙以下履歷書之ニ同シ

軍醫部講習生入學願

某 備

陸軍出身志願ニ付此度軍醫部講習生入學(自費入學)奉願候間御檢査ノ上御採用被下度別紙履歷書並ニ醫術開業免狀(藥舖開業免狀)寫相添此段奉願候也

府(縣)何族(平民)

戶主名何男(兄)弟(伯)叔(甥)(附籍)

何國何郡(區)何町(村)何番地住(寄留)

姓 名 印

年號月日生  
年號月何年何ヶ月

身元引受人

府(縣)何族(平民)

東京府下何郡(區)何町(村)何番地住(寄留)  
姓 名 印

年號月日

(軍醫本部長)

職官姓名殿

前書之通調査候處相違無之候也

府(縣)何郡(區)何町(村)戶長戶長アラサ地ハ區長

姓 名 印

前書之通相違無之候也

府(縣)知事(令)

姓 名 印

履歷書式書式ニ示ス外履歷ニ係ル者アル片ハ悉ク附スヘシ

履歷書

府(縣)何族(平民)職業

戶主名何男(兄)弟(伯)叔(甥)(附籍)

姓 名

年號月日生  
年號月何年何ヶ月

一祖父母 何某 存亡

一父母(養父母) 全 全

此他兄弟姊妹等在籍ノ者ハ皆之ニ準シテ記載スヘシ

一何年月日ヨリ何年月日マテ何學校(何塾)ニ入り教師某ニ就テ何學  
修業

一何年月日ヨリ何年月日マテ何學研究ノ爲メ何國外國ヲ云ニ在留

一何年月日何學校(何塾)ニ於テ何學卒業何年月日右證ヲ受ク

一何年月日内務省第何號醫術開業免狀(藥舖開業免狀)ヲ受ク

一何年月日任何官(補何等出仕)(免本官)出仕被免(何省(府) (縣)等)

一何年月日何職被申付月給(何職被免) (何省(府) (縣)等)

一何年月日何ニ依テ賞典何々々下賜ル

一何年月日何ノ科ニ依リ何罰被申付

右之通相違無之候也

本人姓 名印

右身元引受人

姓 名印

全

年號月日

前書之通相違無之候也

府(縣)何郡(區)何町(村)戶長戶長アラサ  
ル地ハ區長

姓 名印

第十四條 陸軍部内ノ者及ヒ華士族平民共檢査ノ定格左ノ如シ

第一則 年齡三十五年以下ノ者

第二則 體格

第三則 學科

第十五條 華士族平民ヨリスル者檢査合格ノ上入學ヲ命スル者ハ

父兄親族其他一家ヲ成ス身元體ナル者二名東京居住ノ者ニ限ルヲ身元引受

人ト爲シ官費ノ者ハ左式第一號自費ノ者ハ第二號ノ入學證書ヲ差

出サシム

第一號證書用紙美濃白紙證券印紙貼

軍醫部講習生入學證書

某儀

陸軍出身志願ニ付此度軍醫部講習生官費入學御許可相成候ニ付テハ御規則嚴重ニ相守誓テ陸軍ニ従事可仕萬一學術不勉強又ハ品行不正等ニテ退學ヲ命セラレ候節ハ入學中ノ費用一切辨償可仕若シ本人上納難致節ハ引受人ヨリ相納可申且本人身上之儀ハ何事ニ依ラス身元引受人ニ於テ引受人連署證書如此候也

府(縣)何族(平民)

戶主名何男(兄)弟(伯)叔(甥)(附籍)

何國何郡(區)何町(村)何番地(寄置)

姓 名 印

年號月

日生 何年何ヶ月

身元引受人

府(縣)何族(平民)

東京府下何郡(區)何町(村)何番地(寄置)

姓 名 印

全

年號月日

全

全

(軍醫本部長)

職官姓名殿

前書之通調査候處相違無之候也

府(縣)何郡(區)何町(村)戶長戶長アラサ  
ル地ハ區長

姓 名 印

前書之通相違無之候也

府(縣)知事(令)

姓 名 印

第二號證書式

軍醫部講習生入學證書

某儀

陸軍出身志願ニ付此度軍醫部講習生自費入學御許可相成候付テハ



御規則嚴重ニ相守慕テ陸軍ニ從事可仕且入學中ノ費用ハ御規則之通上納可致若シ本人上納難致節ハ引受人ヨリ相納可申其他本人身上之儀ハ何事ニ依ラヌ身元引受人連署證書如此候也

府(縣)何族(平民)

戶主名何男(兄)(弟)(伯)(叔)(甥)(附籍)

何國何郡(區)何町(村)何番地住(寄留)

姓 名 印

年號月日生  
年號月何年何ヶ月

身元引受人

府(縣)何族(平民)

東京府下何郡(區)何町(村)何番地住(寄留)

姓 名 印

全

年號月日

全

(軍醫本部長)

職官姓名殿

前書之通調査候處相違無之候也

府(縣)何郡(區)何町(村)戶長戸長アラサ  
地ハ區長

姓 名 印

前書之通相違無之候也

府(縣)知事(令) 姓 名 印

第十六條 講習生入學ノ時第四條ノ旨趣ニ基キ左ノ如誓文牒ニ署名捺印シ其志操ノ確實ヲ證セシム

誓文牒

陸軍出身出願ニ付今般軍醫部講習生入學奉願候處御許容相成候ニ付テハ自今御規則嚴重ニ相守慕テ陸軍ニ從事可仕且入學中ハ家事故障ハ勿論假令ヒ病氣ト雖モ自ラ免除ヲ請願致シ候等ノ儀ハ仕間敷候依テ誓文如件

年號月日

全 姓 名 印

全

○明治十八年八月陸軍省達第三拾五號

今般陸軍々醫部講習生八拾五名召募候條無遺漏管下へ布達シ同講習生假規則第拾貳條揭示之通取計入學志願之者へ九月十日迄ニ軍醫本部へ出頭候樣可致候依テ左ニ軍醫部講習生入學檢査格例及志願者心得相添此旨相達候事

明治十八年軍醫部講習生入學檢査格例

第一條 軍醫部講習生檢査ヲ分テ三則トス

第一則 体格

第二則 學科

第三則 術科

第一則ノ檢査ハ年齡三十五年以下ニシテ體質強健ノ者タルヘシ但年齡ヲ算スルニハ明治十八年ヲ以テ期トス

第二則ノ檢査ハ左ノ科目トス

軍醫生

藥學生

其一 理學

其二 化學

其三 解剖學

其四 生理學

其五 病理學

其六 藥劑學

其七 內科學

其八 外科學

第三則ノ檢査ハ左ノ科目トス

其一 內科病者理化學的診斷 但實地口述 定情分析

其二 外科病者理化學的診斷 但實地口述 藥物試驗法

其三 外科器械用法及繃帶術 但實地口述 顯微鏡用法

第二條 右ニ示ス外特ニ專門學及ヒ國語學等ノ檢査ヲ請フ者アルキハ之ヲ許可シ其成績ニ由リ若干ノ點數ヲ與フ

第三條 檢査ノ順序ハ第一則合格ノ上第二則ニ及ヒ第二則合格ノ上

第三則ニ及フ

第四條 検査科目中其一科ニ於點數合格セサル者ハ假令總點數ニ於テ合格スト雖モ採用セズ

但第二條ノ検査ハ此限リニアラス

軍醫部講習生入學志願者心得

第一條 軍醫部講習生ハ該規則第二條ニ據リ陸軍部内及ヒ華士族平民中入學志願ノ者ヲ検査シ合格者ノ内ニ就キ優等ノ者ヨリ順次ニ採用ス

第二條 講習生志願者ノ検査ハ總テ軍醫本部ニ於テ之ヲ爲ス者トス

但陸軍部内ノ者検査場ニ往復スルルハ給與概則第十一章第二十

一條ニ依リ旅費日當金四拾錢滞在日當金貳拾八錢ヲ支給ス華士

族平民ニ在テハ検査場往復ノ旅費並ニ滞在費ハ一切自辨タルヘ

シ

第三條 検査場開設ノ月日ハ軍醫本部ヨリ各所管エ通報スヘシ然ル

ルハ定規ノ宿泊證書ヲ附與シテ上京セシメ華士族平民ニ在テハ府

縣廳又ハ郡區役所ヲ經テ本人ニ達シ上京セシムヘシ

第四條 講習生志願ノ者ハ必ス検査ノ時日ニ先チ上京軍醫本部ニ出

頭シ指揮ヲ受クヘシ

第五條 検査中病氣又ハ事故等ニ依リ當日出場ヲ缺ク者アルモ之カ

爲ニ時日ヲ遷延シ更ニ検査場ヲ開クコトナシ

第六條 陸軍部内ヨリ志願ノ者ハ該假規則第十二條ニ從ヒ華士族平

民ヨリ志願ノ者ハ同第十三條ニ示ス所ノ手續ヲ爲スヘシ

但検査格例第二條ノ検査ヲ請フ者ハ其科目ヲ別紙ニ記載シテ差  
出スヘシ

第四節 種痘醫規則

○九年四月内務省甲第八號布達

第一條 種痘術ハ免許狀所持スル者ニ非レハ之ヲ許サズ

但醫術開業免狀所持ノモノ並醫術ヲ以テ官省府縣ニ服事スルモノハ此限ニアラス

第二條 種痘醫タランモノハ師家ヨリ其術習熟ノ證書ヲ受履歴書ヲ

副ヘテ地方廳ニ願出ヘシ地方廳ニ於テハ檢閲ノ上免許狀ヲ與ヘ毎年兩度三月九月當省ヘ届出ヘシ

但從前種痘免除ヲ得シ者ハ其履歷並ニ免狀ヲ得タル手續ヲ詳記シ地方廳ニ出シテ更ニ免許狀ヲ受クヘシ

第三條 種痘免許狀ハ之ヲ他人ニ讓ルヲ許サス故ニ本人其業ヲ廢スルカ或ハ死去スルキハ速ニ之ヲ返納スヘシ

第四條 種痘醫タル者ハ其術ノ普及ヲ主トシ且勉メテ新鮮有力ノ痘苗ヲ撰フヘシ

第五條 種痘醫ハ接種後第六七日ニ於テ必ス點檢ヲ遂ケ善感ノモノハ第一號式種痘濟ノ證書ヲ與ヘ不善感ノモノハ直チニ再種シ或ハ直チニ再種シ難キ者ハ其旨趣ヲ記シテ與ヘ置後日再種ヲ怠ルヘカヲサルノ旨ヲ懇諭スヘシ

第六條 種痘醫ハ毎年兩度一月ヨリ六月マテ七月ヨリ十二月迄第二號式ノ表ヲ製シ區戶長若クハ區務取締ニ出スヘシ

第七條 小兒出生七十日ヨリ滿一年迄種痘ノ善期トス爾後五年或ハ

七年毎ニ必再三接種シテ天然痘ヲ豫防シ且前効ノ存否ヲ檢スヘシ

但近傍ニ天然痘流行スルキハ初種ノ久暫ニ關セズ必再種シ且其流行ノ緩急病症ノ輕重等速ニ區戶長若クハ區務取締ニ届出ツヘシ

(表省略)

第五節 獸醫免許規則附受験人心得

○明治十八年八月第貳拾八號布告

獸醫免許規則別冊ノ通制定シ明治十九年七月一日ヨリ施行ス右奉 勅旨布告候事

(別冊)

獸醫免許規則

第一條 獸醫ハ獸醫學術ノ試験ヲ受ケ農商務卿ヨリ開業免狀ヲ得タルモノトス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經

由シテ農商務省ニ願出ツヘシ

第三條 官立及府縣立ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ農商務卿ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四條 外國ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ヲ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ獸醫學ノ開業免許ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ農商務卿ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條 獸醫學ニ乏シキ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ農商務卿ハ獸醫學術ノ試験ヲ經サル者ト雖モ其履歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下附ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ獸醫籍ニ登録シ時々之ヲ公告スヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニヨリ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ツヘシ

第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金貳拾五錢ヲ納ムヘシ

第十條 獸醫廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第十一條 獸醫其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ農商務卿其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ

但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ

第十二條 前條ニ據リ獸醫禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ農商務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ

第十三條 農商務卿ハ獸醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖モ本人ノ行狀ヲ勘査シ特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ

第十四條 官許ヲ得スシテ獸醫ノ業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

○明治十八年八月第拾七號達

今般第貳拾八號ヲ以テ獸醫免許規則布告相成候ニ付獸醫開業試驗規則左ノ通相定メ明治十九年七月一日ヨリ施行ス

獸醫開業試驗規則

第一條 獸醫ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試験ヲ受クヘシ

第二條 農商務卿ハ毎年二回獸醫開業ノ試験ヲ舉行スヘシ

但試験ヲ舉行スヘキ地方及ヒ試験期日ハ六箇月前ニ告示スヘシ

第三條 農商務卿ハ主事者及ヒ試験委員ヲ派遣シ試験一切ノ事ヲ監督整理セシムヘシ

但時宜ニ依リ地方官ニ委任シ其試験ヲ執行セシムルコトアルヘシ

第四條 農商務卿ハ獸醫學術開業試験ヲ舉行スル毎ニ官立公立獸醫學校又ハ農學校ニアリテ獸醫學ヲ專修シタル者又ハ地方ニ於テ名望アル獸醫學者等ヲ選ヒ試験委員ヲ命スルコトアルヘシ

第五條 獸醫學術試験科目ハ左ノ如シ

第一 家畜解剖學

第二 同生理學

第三 同藥物學

第四 同內科學

第五 同外科學

第六條 獸醫學術ノ試験ヲ受ケント欲スル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月十五日迄ニ其書類ヲ取纏メ農商務省ニ進達スルモノトス

第七條 試験問題ハ試験主事者試験委員協議ノ上之ヲ選定シ試験場ニ臨ミ受験人ヲシテ筆答セシムヘシ  
但時宜ニヨリ口答セシムルコトアルヘシ

第八條 試驗主事者ハ試驗終ルノ後試驗委員ト與ニ其成績ヲ評定シ  
及第シタル者ニハ及第證書ヲ與フヘシ

但及第證書ニハ主事者試驗員連署スヘシ

第九條 試驗ニ落第シタル者ハ六箇月ヲ經ルニ非レハ再試驗ヲ請フ  
コトヲ得ス

右布達候事

○明治十八年八月農商務省第拾九號告示

今般太政官第拾七號ヲ以テ獸醫開業試驗規則布達相成候ニ付受験人  
心得左ノ通相定候條此旨告示候事

受験人心得

第一條 獸醫開業試驗ハ當省ヨリ告示シタル試驗舉行地ノ中各自便  
宜ノ地ニ於テ之ヲ受クルコトヲ得ヘシ

第二條 獸醫開業試驗ヲ受ケント欲スル者ハ本年第十七號布達獸醫  
開業試驗規則第六條ニ準據シ其願書ヲ居住ノ地方廳ヘ差出スヘ  
シ

第三條 前條許可ノ指令ヲ受ケタル者ハ當省ヨリ告示シタル期限迄

ニ試驗舉行ノ地ニ着シ宿所氏名ヲ其地方廳ヘ届出ヘシ

第四條 試驗場ノ取締上不都合ト認ムヘキ所爲アル者ハ主事者ヨリ  
退場セシムルコトアルヘシ

願書式

獸醫開業試驗願

住所 寄留ナレハ本籍  
ヲ併記スヘシ

族籍

氏 名

年 月 生

私儀何年何月何地ニ於テ獸醫開業試驗相受度別紙書類相添ヘ此段奉  
願候也

年 月 日

右 氏 名 印

戸長 氏 名 印

農商務卿宛

第一編行政

第十八類衛生

獸醫免許規則附受験人心得 入齒々抜口中療治接骨等  
營業鍼灸術營業 醫師營業上ノ犯罪及ヒ不正ノ爲所

○內務省

第一條 宮城縣入齒々拔  
口療治接骨等  
營業者ノ外ニ  
ハ右ノ業トアル  
ハ灸按摩等ノ者  
ニモ合蓄セラレ

第二條 從來口科  
又ハ整骨科ノ者  
明治十一年五月十二  
月御達ニ據リ醫  
籍編入進達ノ上  
御省ヨリ免狀其下  
附右ノ者ヲ除キ  
他ノ者如キ營業  
ヲ爲ス者ノ取締  
相立候儀ト心得  
可然哉

第三條 營業鑑札  
ハ應費ヨリ支辨  
スハキヤリハ地  
方スヘキヨリ支辨  
ス

第六節 入齒々拔口中療治接骨等營業

○十八年三月內務省甲第七號達  
入齒齒拔口中療治接骨等營業之者ハ明治十六年十月第卅四號布達ニ據  
リ醫術開業試驗ヲ經ルニ非レハ新規開業不相成候條從來之營業者ハ  
此際各地方廳ニ於テ鑑札ヲ付與シ相當之取締法相立可申此旨相達候事  
但既ニ取締法相設居候向ハ更ニ本文之手續ヲ爲スニ及ハス

第五節 鍼灸術營業

○十八年三月內務省甲第拾號達  
鍼灸術營業者之儀ハ從來開業之者并ニ新規開業セントスル者ハ自今  
出願セシメ其修業履歷ヲ檢シ相當ト認ムルトキハ差許不苦其取締方  
之儀ハ便宜相設可申此旨相達候事  
但既ニ營業差許タルモノハ更ニ出願セシムルニ及ハス

第二款

第一節 醫師營業上ノ犯罪及ヒ不正ノ

所爲

第四條 業方者  
ハ應費ヨリ支辨  
スハキヤリハ地  
方スヘキヨリ支辨  
ス

第五條 業方者  
ハ應費ヨリ支辨  
スハキヤリハ地  
方スヘキヨリ支辨  
ス

第六條 業方者  
ハ應費ヨリ支辨  
スハキヤリハ地  
方スヘキヨリ支辨  
ス

第七條 業方者  
ハ應費ヨリ支辨  
スハキヤリハ地  
方スヘキヨリ支辨  
ス

第一編行政 第十九類外交 海外旅券規則

○十五年八月第三十九號布告  
醫師タル者營業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ所爲アルトキハ中央衛生會  
ノ審議ヲ經內務卿ニ於テ其業ヲ停止若クハ廢止スルコトヲ得  
但其事開業免許ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本項ニ準シテ處分スルコ  
トアル可シ

第十九類 外交

第一款

第一節 海外旅券規則

○十一年二月外務省第一號布達  
從來當省ヨリ發行候海外行免狀之儀海外旅券ト改稱別紙規則相定候  
條此旨布達候事  
旅券ハ日本國民タルヲ證明スルノ具ニシテ海外各國ニアリテ要用少  
ナカラサルヲ以テ外務省ヨリ之ヲ發行ス規則左ノ如シ

第一條

旅券ヲ請フ者ハ別紙雛形ノ書面ヲ以テ外務省又ハ開港場管廳へ願出



通

明治十八年四月廿日

之ヲ受取ルヘシ尤郵便ヲ以テスルモ若シカラス旅券ヲ受取ラハ直ニ其示シアル所へ當人姓名ヲ自記スヘシ

第二條

旅券ヲ受ルモノハ手数料トシテ金五十錢ヲ納ムヘシ但旅券ハ一人一枚ニ限ルヘシ若シ五歳以下ノ小兒其父母同道ナルハ其父母ノ旅券ニ附記スルヲ以テ足レリトス

第三條

内地ニ於テ右旅券受取ル間合之ナキカ又ハ海外ニ於テ遺失シタルカノトキハ其國在留ノ日本公使館又ハ領事館へ其趣ヲ記載セル書面ヲ出タシ自身出頭シテ願ヒ受クヘシ但其手数料トシテ金二圓ヲ納ムヘシ

第四條

公用ヲ以テ旅行シ官費ヲ以テ留學スル者ハ内地ニアリテハ其官廳ヨリ直ニ外務省ニ掛合海外ニ在リテハ前條ノ趣ニ從ヒ旅券ヲ受取ルヘシ但手数料ハ納ムルニ及ハス

第五條

旅券ハ其趣シヘキ國ノ公使又ハ領事ノ證明ヲ得ル儀其國ニヨリ要用少ナカラス其節ハ其館ニ就テ直ニ之ヲ請フヘシ但其定規ニ隨ヒ手数料ヲ拂フヘキモノトス

第六條

海外ニアリテ所持ノ旅券我領事官ノ證明ヲ要用トスル下アリ其節ハ之ヲ請ヒ得ヘシ但領事官ナキ地ニ於テハ公使館ニ至リテ之ヲ請フヘシ

第七條

旅券ハ歸朝ノ後三十日以内ニ其最初受取リタル官廳へ之ヲ返納スヘシ郵船等ノ海員常ニ旅券ヲ要スル者ハ此限ニ在ラス但シ海外ニアリテ我公使又ハ領事館ヨリ受取リタル者ハ外務省ニ返納スルヲ以テ足レリトス

旅券願書式

私儀何々ノ爲某國へ罷越或ハ往來致度ニ就キ旅券御渡方奉願候也

明治 年 月 日

何府縣下

何國何郡何町村何番地又ハ寄留

士族屬職業

何 姓 名 印

何年何月

外務省又ハ何府縣御中

右之通相違無之候也

戶長 姓 名 印

前書之通證明候也

府知事縣令姓名印

(旅券文言省略)

第二節

清朝兩國在留日本人取締規則

○十六年三月第九號布告

清國及ヒ朝鮮國在留日本人取締規則左ノ通制定ス

第一條 清國及ヒ朝鮮國駐劄ノ領事ハ在留ノ日本人該地方ノ安寧ヲ

妨害若クハ風俗ヲ壞亂スルニ至ルヘキ者ト認定スル時ハ一年以上  
三年以下在留スルコトヲ禁止スヘシ但其情狀ニ由リテハ其期限間  
當ノ保證金ヲ出サシメ在留セシムルヲ得

(明治十八年八月第二十六號布告改正)

第二條 在留ヲ禁止セラレタル者ハ十五日以内ニ退去スヘシ若シ期  
限内退去シ難キ正當ノ事由アリテ其旨ヲ申立ツルキハ領事ハ相當  
ノ猶豫期限ヲ與フルヲ得

第三條 保證金ヲ出シタル者再ヒ第一條ノ舉動アリト認定スルキハ  
領事ハ其保證金ヲ沒收シ仍ホ在留ヲ禁止スヘシ

第四條 退去期限若クハ猶豫期限内ニ退去セサル者及ヒ禁止期限ヲ  
犯シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ貳圓以上百圓以  
下ノ罰金ヲ附加ス

第五條 此規則ノ處分ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第二節ノ二

清國在留日本國人心得

○六年十月第三百三十七號布告

清國在留日本人心得方規則別紙ノ通相定清國ニ於テハ領事ヨリ布達セシメ候得共追々渡航之者モ有之儀ニ付爲心得此旨布告候事  
今般清國在留日本人ノマメ左ノ通心得方規則相定候ニ付テハ嚴ニ之ヲ遵奉シ敢テ違背スヘカラス若シ犯スモノ有之ニ於テハ違式註違條例ニ照準シ相當ノ過料取立ヘク此旨布達候事

第一條 陸海軍士官及ヒ官員ヲ除クノ外平常劍銃及ヒ他武器類ヲ携帶スヘカラサル事

但遊獵ノタメ鳥銃ヲ携フルハ此限ニアラス

第二條 路上ニテ車馬ヲ暴驅シ行人ヘ迷惑ヲ掛クヘカラサル事

第三條 亂醉放歌シ又ハ車馬ノ往來ヲ妨碍ナスヘカラサル事

第四條 花園又ハ街頭ノ草木ヲ折取ルヘカラサル事

第五條 溝河下水又ハ往來等ヘ土芥瓦礫ヲ投棄スヘカラサル事

第六條 市中往來筋ニ於テ猥リニ大小便ヲスヘカラサル事

第七條 裸躰又ハ袒裼或ハ股脚ヲ露ハシ醜態ヲナスヘカラサル事

第八條 身躰ヘ刺繡ヲナスヘカラサル事

第九條 男女相撲並蛇遣ヒ其他醜態ヲ見世物ニ出ス可ラサル事

第十條 婦人ニテ謂レナク斷髮スヘカラサル事

第十一條 戶外ヘ出ルニ斷髮者ハ必ス帽子ヲ冠リ結髮者ハツキコミ髮ニテ出ツ可ラサル事

第十二條 男女トモ戶外ヘ出ルニハ相當ノ衣服ヲ着シ且手拭ヲ以テ頭或ハ面ヲ覆フ可ラサル事

第十三條 婦女子ハ淫風ニ流レ娼妓ニ紛シキ所業ナスヘカラサル事

### 第三節 朝鮮國間行里程

○十六年十月第三十二號布達

朝鮮國間行里程取極約書

第一條 兩國政府ハ（日本歷明治十五年八月三十一日朝鮮曆壬午年七月十七日）各全權大臣ノ議定シタル續約第一款ノ旨趣ニ依リ朝鮮國仁川元山釜山ノ三港ニ於テ今年可取廣間行里程ヲ雙方委任ノ大臣協議ノ上左ノ通り定メタリ

第二條

仁川港

東ハ安山始興果川ヲ限ル

東北ハ陽川金浦ヲ限ル

北ハ江華島ヲ限ル

元山港

西ハ德源府管下馬息嶺ヲ限ル

南ハ安邊府管下古龍池院ヲ限ル

北ハ文川郡管下業加直ヲ限ル

釜山港

東ハ機張ヲ限ル

西ハ金海ヲ限ル

南ハ鳴湖ヲ限ル

北ハ梁山ヲ限ル

右ニ定メタル各地ノ境界ニハ兩國官吏立會ノ上標木ヲ立テ以テ四方ノ限止ヲ明カニスヘシ

第三條 來ル日本曆明治十七年朝鮮曆甲申年更ニ擴張スヘキ里程ノ

境界ハ其期ニ至リ兩國委員議定ノ上此約書ノ附録ト爲スヘシ

第四條 此里程内ニ於テ日本人隨意遊獵スルヲ得ルト雖トモ人家接

近ノ地並ニ朝鮮政府ノ禁制スル場所ニ於テ發銃スヘカラス

第五條 日本人此里程内ニ在テ或ハ暴行ヲナシ又ハ境界ヲ踰越スル

者アル時ハ地方官吏ニテ之ヲ取押ヘ日本領事館ニ送交シ或ハ其地

ニ引留置領事官ニ通知シ處分ヲサシムヘシ但シ引留又ハ送致ノ

際苛虐ノ取扱ヲ爲ス可ラサルハ勿論引留時間ハ領事館往復ニ必要

ナル時間ニ限ルヘシ

第六條 此里程内ニ於テ朝鮮人往來ノ日本人ニ對シ暴行ヲ爲ス者ア

レハ地方官速カニ吏ヲ派シ之ヲ救護シ其暴行人ヲ嚴罰スヘシ

第七條 日本人間行ノ際或ハ日暮歸ル能ハス或ハ途中疾病事故等有

テ行ク能ハサル者ニ遇ハ沿路ノ人民其請ニ應シテ轎馬ヲ雇ヒ或ハ

其家ニ休宿セシムル等懇切ノ取扱ヲナスヘシ但シ其轎馬費宿料等

ハ該日本人ヨリ完済スヘシ

第八條 第四條ヨリ以下ノ諸條ハ朝鮮政府ニテ里程内ノ鄉村及道路

ニ揭示シ人民ヲシテ能ク遵奉セシムヘシ

右確實ナルヲ証シ兩國ノ各委任大臣記名調印スル者也

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辨理公使竹添進一郎印

全權大臣特辦交涉通商事務閔泳穆印

○十八年一月第二號布達

朝鮮國間行里程取極約書附錄別紙ノ通訂定ス

茲ニ日本曆明治十六年七月二十五日取極タル本約書第三條ニ據リ今

年更ニ擴開スヘキ間行里程ノ境界ヲ兩國委員會同議定シテ左ニ開列

ス

仁川港

南ハ南陽水原龍仁廣州ヲ限ル

東ハ京城東中浪浦ヲ限ル

元山港 西北ハ坡州交河通津江華ヲ限ル

西ハ文川妙終境ヲ限ル

南ハ淮陽通川ヲ限ル

釜山港

東ハ南倉ヲ限ル

北ハ老陽ヲ限ル

西ハ昌原馬山浦三浪倉ヲ限ル

○三平南ハ天城島ヲ限ル

右確實ナルヲ證シ兩國ノ委任大臣記名調印シ以テ朝鮮國間行里程取

極約書ノ附錄ト爲ス者ナリ

大日本國明治十七年十一月二十九日

大朝鮮國開國四百九十三年正月十二日

委任大臣辦理公使 竹添進一郎 印

委任大臣督辦交涉通商事務金宏集 印

第二款 外國人ニ關スル規則

第一節 東京在留外國人遊步規程

○三年閏十月十二日布告

東京在留外國人遊步ノ期程別紙圖面之通新利根川又江戸川口ヨリ北ノ方金町迄夫ヨリ西ノ方水戸街道十住宿大橋迄夫ヨリ隅田川ヲ登リ上古谷止郷迄夫ヨリ小室村高倉村小矢田村萩原村宮寺村三木村田中村諸村ヨリ朱引之通日野渡場迄夫ヨリ玉川口迄ヲ以テ限リトシ右區内ハ外國人共遊步御差許之儀ニ付勝手ニ徘徊イマスヘク就テハ彼我禮義モ異リ殊ニ彼方貴人モ手輕ニ旅行イタシ候振合ニテ在々人民ノ未々外國人之情態ヲモ熟知セサル故接對方ニ於テ不都合ノ筋ハ勿論不作法等有之候テハ不相濟儀ニ付末々迄相互ニ心附兼テ御布告之趣心得違無之様可致事

一外國人遊步之節若途中ニオイテ休息又ハ瀕暮ニオヨヒ止宿等相望

候ハ、所役人方へ案内イタシ差支無之場所ニ候ハ、望通取計可遣旅籠代ノ儀ハ相對テ以請取可申事

一外國人出先ニオイテ差掛リ人足履度旨申出候ハ、相當之賃錢請取身元相分リ居候モノ差出候様可致事

一外國人共門塀等アル場所ハ勿論招キニアラスシテ人家へ猥入ニ不立人等ニ候得共若シ庭構園地等一見イタシ度旨申聞候ハ、立入不苦場所へハ案内致スヘク差支有之場所ハ相斷可申事

一社寺ハ庶人立入拜禮致候場所へ立入候儀ハ不苦靈秘ニイタシ庶人猥リニ不爲立入場所其餘廟所墳墓又ハ境内ノ切之場所ハ相斷可申一尤彼方懸望ニテ其主司ニオイテモ強テ差支無之候ハ、臨機之取計ヲ以差許候トモ不苦事

一東京開市場之外諸村ニオイテハ外國人ト商賣取引不相成筋ニ候得共通行之節聊ノ土産物等買得ノ儀相望候ハ、賣渡候テ不苦萬一拔荷密商等ノ所業ニ及ヒ候ハ、屹度可申付候條若拔荷密商等見出候歟又ハ企候モノ有之ヲ承リ込候ハ、速ニ東京府又ハ其支配之役

所へ可訴出其品ニ寄褒美可被下事  
 一宗門之儀前々ヨリ之御法度相守彌以堅ク可相制若異宗門之尊イヌ  
 シ又ハ申勸候モノ等有之候ハ、其段早速其支配ノ役所へ可訴出事  
 一阿片烟草吸喫致候儀ハ嚴禁ニ付萬一窃ニ相用候歟又ハ所持イヌシ  
 候歟或ハ外國人ヨリ密ニ買取候モノ及見聞候ハ、前同様可訴出事  
 一外國人ニ對シ亂暴狼籍ニ及ヒ候テハ禮義ヲ失ヒ候耻辱ノミナラス  
 第一御威光ニモ相拘リ以ノ外ノ事ニ付兼テ御布令モ有之今後右様  
 心得違ノ者ハ無之筈ニ候得共町村ニオイテモ兼テ手等申合セ置万  
 一狼籍ニ及候者有之節ハ所ノモノ打寄擲取若シ手ニ餘リ候ハ、打  
 果シ候トモ不苦若シ取逃シ候ハ、地元町村ヨリ時刻ヲ不移其支配  
 ノ役所並東京府へ口上ヲ以成トモ手分ケイヌシ迅速ニ可届出候其  
 餘詮議ノ手掛ニ可相成儀等及見聞候ハ、聊之事ニテモ不隱置是又  
 早々可申出其品ニ寄夫々御褒美可被下事  
 附亂暴ヲ受候外國人ノ國名姓名等相分リ候丈ケ承糺シ可申立且  
 當人ハ手當行届候丈ケ介抱致シ精々心附可遣万一絶命ニ及候ハ

○太政官  
 内務省  
 儀ニ付  
 菊御紋章  
 度々御儀  
 之候處御  
 是之何一  
 之右ハ般  
 於之相用  
 候哉往々  
 儀出儀

、即大切ニ守護イヌシ差圖相待可申事  
 右之條々急度可相守若シ後日之引合ヲ通シカタメ及見聞候儀ヲ押隠  
 シ追テ顯ル、ニオイテハ當人ハ勿論所役人迄モ夫々嚴重谷可申付候  
 條心得違無之様可致自今以後毎年一度ツ、其所役人ヨリ前書之趣小  
 前之モノへ爲讀聞無遺失様可相守モノ也  
 (別紙圖面省略)

第二十類 雜則

第一款 第一節 菊御紋章

○明治元年三月廿八日布告  
 一(略之)  
 一提燈又ハ陶器其外賣物等ニ御紋ヲ畫キ候事共如何之儀ニ候以來右  
 之類御紋ヲ私ニ附候事急度可禁止旨被仰出候事  
 但御用ニ付是迄被免之分モ一應伺出可申事  
 ○二年八月廿五日布告

向等有之取扱方差也  
支候條此段相伺候  
也  
明治十八年七月四日  
指令  
之趣桐章ノ儀  
伺相用不苦儀ト  
可ハ相心得事儀ト  
月明治十六年八月一日

社寺ニテ是迄菊御紋用非來者不少候處今般御改正相成社ハ伊勢八幡上下加茂等寺ハ泉涌寺般舟院等ノ外ハ一切被差止候旨被仰出候事  
但格別由緒有之社寺ハ由緒書ヲ以テ可窺出候事

○四年六月第五百五十九號布告  
菊御紋禁止ノ儀ハ兼テ御布告有之候處猶又向後由緒ノ有無ニ不關皇族ノ外總テ被禁止候尤御紋ニ紛敷品相用候儀モ同様不相成候條相改可申事  
但シ從來諸社ノ社頭ニ於テ相用來候分ハ地方官ニ於テ取調可申出事

第一節ノ二 陸軍徽章

○七年三月陸軍省第三百三十一號布達  
陸軍徽章有之服帽等其職ニ非スシテ私ニ着用賣買共一切不相成旨辛未十一月及布達置候處先般服制改定候得共猶從前布達ノ通賣買着用共不相成候此旨更ニ布達候事

第一節ノ三 海軍徽章

○七年三月海軍省第一號達  
海軍徽章有之服帽等其職ニ非スシテ私ニ着用並ニ賣買與物共一切不相成候條此旨相達候事

第二節 帶刀禁止

○九年三月第三十八號布告  
自今大禮服着用并ニ軍人及ヒ警察官吏等規アル服着用ノ節ヲ除クノ外帶刀被禁候條此旨布告候事  
但違背ノモノハ其刀可取上事

第二節ノ二 神輿供奉

○十一年三月內務省乙第二十二號達  
諸神社神輿渡御之節供奉ノ者帶刀之儀ニ付明治九年(七月)舊教部省甲第五號ヲ以テ神官並官國幣社ハ相達置候趣ニ候所右ハ府縣社以下モ同様專ラ古代之裝飾ニ摸倣シ神輿ニ供奉致來候舊例有之向ハ其人員ノミ供奉中ニ限リ帶刀不苦尤其都度其筋ハ可爲届出儀ト可心得此旨相達候事



但普通祭服用用之者帶刃不相成儀ハ勿論タルヘシ

### 第三節 復讐嚴禁

○六年二月第三十七號布告

人ヲ殺スハ國家ノ大禁ニシテ人ヲ殺ス者ヲ罰スルハ政府ノ公權ニ候所古來ヨリ父兄ノ爲ニ讐ヲ復スルヲ以テ子弟ノ義務ト爲スノ風習アリ右ハ至情不得止ニ出ルト雖モ畢竟私憤ヲ以テ大禁ヲ破リ私義ヲ以テ公權ヲ犯ス者ニシテ固ヨリ擅殺ノ罪ヲ免レス加之甚シキニ至リテハ其事ノ故誤ヲ問ハス其理ノ當否ヲ顧ミヌ復讐ノ名義ヲ狹ミ濫リニ相構害スルノ弊往々有之甚以テ不相濟事ニ候依之復讐嚴禁被仰出候條今後不幸至親ヲ害セラル、者於有之ハ事實ヲ詳ニシ速ニ其筋ヘ可訴出候若無其儀舊習ニ沉ミ擅殺スルニ於テハ相當ノ罪科ニ可處候條心得違無之様可致事

### 第四節 富興行嚴禁

○元年十二月二十三日布告

當興行之儀ハ兼而御禁制ニ有之處近年諸國ニ於テ金錢融通ヲ名トシ

或ハ社寺再建等ニ托シ興行致候向モ有之趣元來洗季之弊風僥倖之利ヲ以テ民心ヲ誘惑スルヨリ自然農工商共其職業ヲ惰リ往々之カ爲ニ家産ヲ破候者モ不少哉ニ相聞ヘ以ノ外ノ事ニ候斯御一新之折柄右様之所業殊ニ御趣意ニ相戾リ候儀ニ付更ニ嚴禁被仰出候事

### 第五節 阿片嚴禁

○元年閏四月 布告

阿片煙草ハ人ノ精氣ヲ耗シ命數ヲ縮メ候品ニ付兼テ御條約面ニ有之候通リ外國人持渡候事嚴禁ノ處近頃竊ニ船載ノ聞有之万一世上ニ流布致シ候テハ生民ノ大害ニ候間買賣ノ儀ハ勿論一己ニ吞用ヒ候儀決テ不相成候若シ御制禁相犯シ他ヨリ顯ル、ニ於テハ可被處嚴料候間心得違無之様末々ニ至ル迄堅ク可相守者也

右御達書府藩縣一同高札ニ揭示可致様被仰出候事

### 第二款

#### 第一節 官更ノ商業

○八年四月第六十五號達

官吏商賈ノ營業不相成ハ勿論ニ候所其區分判然タラサルニ付自今左ノ通被定候條此旨相達候事

但從前ノ指令之ニ抵觸スルモノハ廢止ト可心得事

第一條 凡ソ官吏タルモノ並ニ其家族トモ他ノ物品ヲ買入レ之ヲ餘人ニ賣リ以テ利ヲ獲ルモノ或ハ他ノ生産ヲ買入レ製作ヲ加ヘ之ヲ販賣シテ利ヲ獲ル等ノ業一切禁止ノ事  
但(八年十月第七十一號達改正)神官教導職區戶長郵便取扱人

學區取締役及等外吏ノ分ハ此限ニアラス

第二條 官吏ノ家族自己ノ財ヲ以テ商賈ノ業ヲ營マント欲スル者ハ分籍別居ノ上相營ムヘキ事

第三條 左ノ數件ハ商賈ノ業ニアラサルニ付官吏タル者ト雖トモ制禁ニアラサル事  
但商賈同様ノ店ヲ開クハ不相成候事

一(八年五月第八十七號達改正)礦山借區營業及ヒ田地ヲ所有シ其利ヲ獲ル事

一田地家屋ヲ貸シテ地代宿賃ヲ獲ル事

一金銀ヲ貸シテ利息ヲ獲ル事

一所有地ヨリ生スル物産ニ製作ヲ加ヘ賣拂事

○十四年五月第三十七號達

官吏商業區分ノ儀ニ付テハ兼テ相達候趣モ有之候所自今道路河港ノ修築海陸ノ運輸土地ノ開墾及ヒ殖産ノ事業ヲ以テ目的ト爲シ設立スル會社ノ株主トナルハ不苦候條此旨相達候事

第一節ノ二 官署ノ拂下物

○八年八月第百五十二號達

官地官林及ヒ不用ノ物品等公ノ入札法ヲ以テ拂下ケ候節其管廳ニ屬スル官員ニ限リ本人ハ勿論其代理人ト雖モ投票爲致候儀不相成候條此旨相達候事

第一節ノ三 藉威調金

○四年十二月二十七日布告

各地方諸官員我役威ヲ以テ内外人民ヨリ調金爲致候様ヲ儀有之候テ

ハ以ノ外ノ事ニ付自今堅ク被禁止候條萬一心得違ノ者有之候節ハ貸借雙方共急度御沙汰可有之候事

第三節 橋錢

○十三年三月十九日公達

人民私費架設ノ橋梁渡津自今軍隊々伍ヲ組ニ行進ノ節ハ其賃錢請求不相成儀ト可心得此旨相達候事

○十四年十二月内務省乙第六十二號達

人民私費ヲ以テ架設ノ橋梁渡津及其私費開鑿ノ道路等憲兵巡行之節ハ單騎獨歩ト雖モ制限着用ノ節ニ限り其賃錢請求不相成候條兼テ許可有之架橋渡船及開路願人共々無漏可相達候此旨相達候事

○十六年六月内務省乙第三十一號達

人民私費ヲ以テ架設ノ橋梁渡津及私費開鑿ノ道路等郵便脚夫ノ飛信遞送并ニ郵便物遞送集配(特ニ配達人タルヲ證スル服ヲ着シ配達スル時)ノ時ニ限り賃錢請求不相成旨客年當省乙第十八號ヲ以テ相達置候所自今郵便局ヨリ左ノ如キ印鑑相渡置候條右所持ノ者ハ制服ノ

着否ニ拘ハラヌ賃錢請求不相成義ト可心得此旨免許人共々遺漏ナク達シ置クヘシ此旨相達候事

二寸五分

第 號

何 國

何 地 郵 便 局 脚 夫

何 之 誰

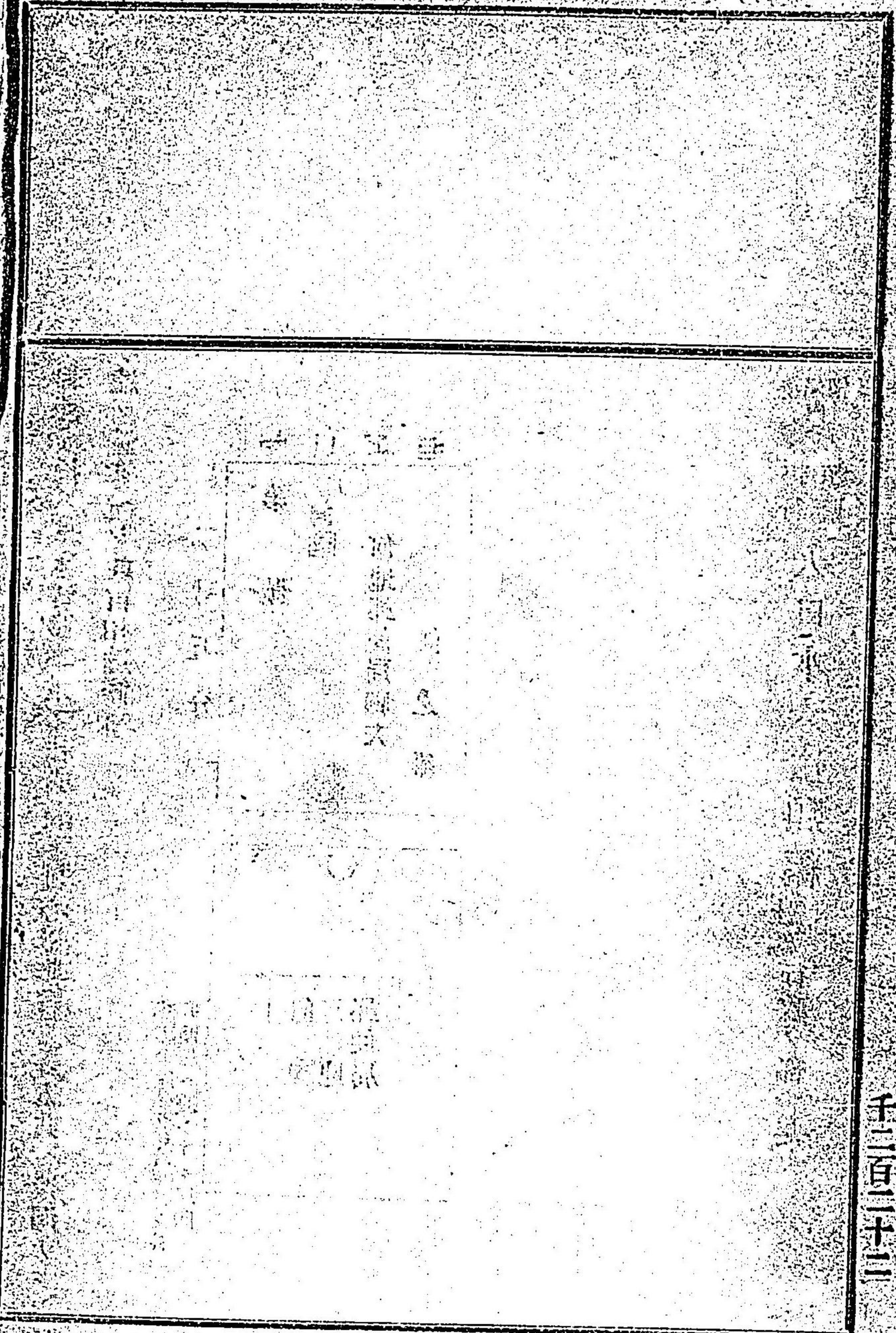
何 國

何 地 郵 便 局

此印ハ兼テ驛遞局ヨリ各郵便局ヘ渡シアル局印

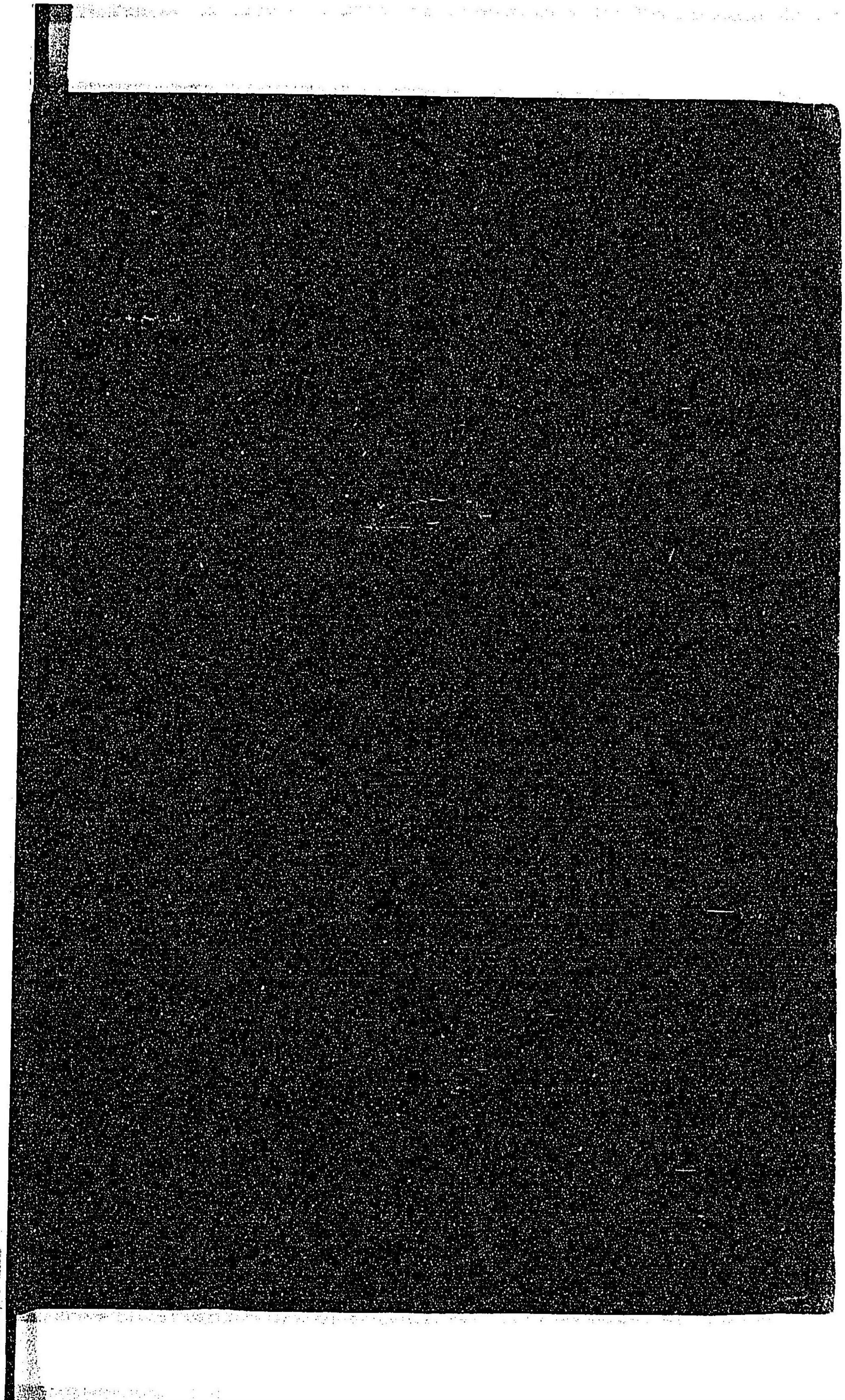
證 類 聚 現 行 大 日 本 六 法 類 編 上 編 行 政 ノ 部 大 尾

2/5/39



147

22



14.1  
22

031035-001-2

CZ-5-09

大日本六法類編

小松 恒/編

上

M19

BBC-0526



